
映画『赤い靴』（1948）における乗り物の含意ならびに階段の配置にみられる形式美志向

栗原詩子（西南学院大学）

アンデルセンの『赤い靴』に題材をとったアーチャーズ（パウエル&プレスバーガー共同）監督のバレエ映画『赤い靴』（1948）は、色彩効果を用いた先駆例として評価され（岡 1950；飯島 1950）、多くのファンを獲得しつつも、アーチャーズ研究においては、「派手かつ冗長」（Vesselo 1948）で、「奥行きのない」（滋野 1950）、「構図のない」（Hockenull 2008）、「実験性の後退した」（Ede 2010）作品として、アーチャーズ研究史から取り残されている。こうした状況の一因は、当作品が、職能と愛の板挟みになる女性バレリーナを扱っており、フェミニズム論（田嶋 1991；Arquette 2000；Thiery 2005）に適しすぎる点にある。

その物語とはこうである。踊り手ビクトリア・ページの才能が、レルモントフ主宰のバレエ団において新作バレエ「赤い靴」で開花するが、スターの地位は「赤い靴」の物語と同様に、踊り続けるだけの人生を要求する。舞台をとるか、愛情や家庭をとるか、という選択に迫られたページは発狂し、ついに死に至る。

さて、発表者は、こうした研究史に抗い、アーチャーズらしい形式美の映像作品として分析する観点を示したい。

手順の第1として、「派手かつ冗長」であることの典型的場面として「山荘に招かれるバレリーナ」の約3分間の映像をピックアップし、この場面に含まれる自動車と階段の移動が、叙述的に冗長、すなわち、物語進行上全く不要かつ異質であることを示す。パリ・ロンドン・モナコを巡業するバレエ団の主宰者であるレルモントフの居室は作品内で他に9回描かれるが、いずれの場合も、ステージと同じ建物内でステージ直近の場所に位置し、食事・教育・運営談義・契約・取材対応など、あらゆることが行われる場である。ところが、作品内で1度だけ、乗り物での移動と長い階段歩行を必要とする山荘内の居室が描かれる。この場面は、物語展開の必要においてではなく映像上に「移動」そのものを提示するために設定されていると推定できる。

そこで第2に水平的な移動を扱う。具体的には、映画内で用いられる移動手段（徒歩・馬車・自動車・列車）に着目し、主役のバレリーナの心的モードが、乗り物に換喩されていることを示す。

そして第3に上下の移動を扱う。階段を用いた上昇と下降がアーチャーズの他作品におけると同様、重要な意味を持ち、さらに当作品の経過時間内にいかに巧緻に配置されているかを示す。すなわち、作品冒頭の矩形階段の上昇と作品末尾の螺旋階段の下降は、アーチの拠点・終着点にあたり、「山荘」場面の階段上昇と劇中劇「赤い靴」での落下を転回点として、アーチ前半には小さな階段上昇、アーチ後半には小さな階段下降が配置されている。

このようにして、水平移動のための乗り物の交換不可能性と、階段運動の不可逆性を明らかにし、作品に揺るがしがたい形式美が織り込まれていることを明らかにする。